鏑木清方文集

七　畫壇時事

鏑木清方文集

七

畫壇時事

白凰社

鏑木清方文集　七　畫壇時事

昭和五十五年六月二十日第一刷發行

著　者　鏑木清方

編　者　山田肇

發行者　高橋謙

發行所　株式會社白凰社
東京都千代田區神田神保町一―二〇
郵便番號　一〇一
電話番號　東京(〇三)二九一―七五七一
振替口座　東京八―九二二四一

印刷・製本　凸版印刷株式會社

定　價　四、八〇〇圓

コード番號　〇三七〇―二一〇七―六九〇六

落丁・亂丁本はお取り替へいたします。

鏑木清方文集

七　畫壇時事

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

I

鄉土會の今日まで……一三
千種さんを譽む……一六
山川君が美人畫の會を催すに就て……一九
邦畫に志す青年に……二〇
帝展はやりやまひ……二七
日本畫の進路……二九
美術の社會に對へる一面……三四
ロシヤ繪の初印象……四二
今年の美術界回顧……四四
川崎君の『オフイリヤ』……五〇

送夏迎秋……五二
日本畫壇の動き……五五
時事小感……五九
帝展中心の雜話……六二
さしあたつての望み……六六
寸　言……六八
近代美術館について美術人でない讀者へ……七〇
會場のはなし……七三
現代人物畫の傾向……七六
歷史畫の更生……八三
帝國美術院は民間團體の强化を計れ……八六
新帝院よ、展覽會に重點を置くな……九一
批評家の立場、作家の立場……九四
帝展問題その他——時局問題一問一答——……九八
思ひよること……一〇九
話題二つ……一二

卓上語……二五
前田、島崎……二九
美術と官權……二三
戰時に開かれる新文展……二五
身勝手ならぬ身勝手……二八
安田靫彦……三一
藝術院と松園さん……三六
繪の働き……三九
寺島紫明君……四三
「三彩」の創刊……四五

II

文展第八回・作家と批評家……一四九
文展第九回・人物畫……一五三
文展第十回・人物畫……一六〇
文展第十一回・人物畫……一七二

文展第十二回・人物畫……一七八

Ⅲ

帝展第一回・力強い表現を望む……一九一
帝展第一回・鑑査の意義とその主張……一九六
帝展第三回・鑑査に就て……一九八
帝展第五回・風俗と品のこと……二〇一
帝展第六回・鑑査難……二〇三
帝展第七回・人物風俗畫……二〇九
帝展第八回・日本畫……二一七
帝展第九回・新人及び好きな作家……二一九
帝展第十回・偶感……二三一
帝展第十回・『罌粟』……二三三
帝展第十一回・邦畫評……二三五
帝展第十一回・任務を了へて……二四一
帝展第十二回・日本畫……二四三

帝展第十三回・雑感……二五三
帝展第十三回・今のこゝろもち……二五六
帝展第十四回・感覺に乏しき日本畫……二六〇
帝展第十四回・人物畫を語る……二六四
帝展第十四回・若き作家達……二七一
帝展第十五回・鑑賞記……二七七
帝展第十五回・日本畫を觀る……二八一
新帝展第一回・審査員の一人として……二八七
新帝展第一回・鑑審査を終りて……二九一
新帝展第一回・第一部評……二九三
新帝展第一回・技術を觀る……三一〇
新帝展第一回・二三の覺書……三一八
新帝展第一回・鑑査後記……三一〇

Ⅳ

新文展第一回・審査所感――思ひよるまゝ――……三一九

新文展第一回・私の報告……三三三
奉祝展と文展の性格……三三九
新文展第四回・評を望まれて……三四一
新文展第四回・官展と審査……三四五

V

國展・有意義な存在……三五五
院展を觀て……三五七
院展大觀……三五七
異常か平明か……三五九
今の心持……三六一
院展の人物畫……三六三
院展の繪……三六五
『居寤泉』その他……三七一
「道成寺」畫題の逸品……三七六
院展評……三八〇
婦女圖……三八六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『杉橋檢校』の作者 …… 三八七
青龍展を觀て …… 三八九
春陽會を見る …… 三九六
帝展第十五回・洋畫第三室をめぐりて …… 四〇四
六潮會に就いて思ふ …… 四〇八
あとがき …… 編者　山田　肇 …… 四一三

圖版目錄

『水仙鶉圖』　傳徽宗皇帝　（重要文化財）……三對向
中扉繪は寫生帖（昭和二十年秋、御殿場）からの轉寫。

I

鄕土會の今日まで

社中の展覽會は、下萌會が一番最初であつたやうに思ふ、同會が明治の終の幾年であつたか、第一回を催したまゝ暫らく中絶して居た、その間に鄕土會の展覽會を開く事になつた。

その時分の展覽會といふものは、技巧のまとまつた、一人前のものでなければ世間もその發表を許さぬといふ狀態であつた、隨つて作その物の本質がよくても腕が足りない爲に、その作品を發表されないことを遺憾に思うたのが有力なる動機で、大正五年に鄕土會と稱して、社中の展覽會を開く事になつた。

極若い人の作品は、老成した作家にも見られない純眞な所があつて、云はゞ未成品の面白味と云ふやうなものがある、さういふものを大きな展覽會で發表するといふことはあまり感心しないが、一社中の展覽會ではそれが自由な立場にあることも一德である。

そんな考で大正五年の六月に、第一回の展覽會を築地倶樂部で催した。その時の出品では大林千萬樹、寺島紫明、大久保靑園などの作がよかつた。山川秀峰はその時京都の舞妓

を描いたが、それが處女出品であつて、漸く及第點に屆いた位であつた。

第二回も翌六年の五月に同じく築地倶樂部で催した。第三回から場所が狹い爲に、美術學校の倶樂部を借る事にし、同倶樂部で四回五回と續けた。第四回あたりから伊東深水、川瀨巴水が新版畫の創作に興味を持ち始めた、それで出品の中にこの版畫を加へることにした。第六回第七回は松坂屋呉服店で開會し、この二回は版畫の出品が一番多かつた。そして今年まで一年も休まず、第八回を三越呉服店で開くことになつた。

第一回を築地倶樂部で催した時には、この展覽會をこれほど長く續ける意思はなかつた。その際であつた、社中のものにも前に云つたやうな目的で始めたので、皆技術が進んで來るやうになつたら、大展覽會へドシ〳〵出品が出來る譯であるから、さうすると社中の展覽會と云ふやうなものは必要もなくなる、さればその生存の必要のある間開くことにした。そんな譯で永くとも四回か五回位は續くかと思うたのであつたが、案外にも段々やつて行くうちには、巣立つ人もある代りに、一方には新に孵る卵もあつて、伊東に段々弟子がつき、門井にもまた弟子が出來るといふ有樣で、さういふ新らしく出來る若い人の爲に、相變らずこの會の必要があつて、今も第一回の時に考へたやうなことが持續けられて居るのである。そんな事で思ひの外回數を重ねた。

これから先も、別に意識して、何ういふ工合にしようと、殊更に考へても居ないが、成

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com